

「聖書の力」(コテモテ3章14-17節)

1 出会い

信仰に導かれる、教会に導かれて洗礼を受ける、そのきっかけとなるのは本当に様々です。また一度入信して、さらに信仰の思いが深くされていく、そのきっかけとなるのも様々です。それは私どもの中にある何もものがそうさせるのではなく、ただ上からの力、神の力によるのであって、当然といえば当然です。神は神がよしとしたもうその時、その所で、そうなさいます。今から挙げる二人の、キリスト教の歴史に名を残している人の場合、そうしたきっかけとなったのは聖書でした。聖書との出会いが彼らを変えていきます。

一人はアウグスティヌスという人です。4世紀から5世紀にかけて、ローマ帝国の時代、北アフリカの教会の司教として活躍した人です。たくさん著作を残し、今のキリスト教の基礎を築いた一人です。彼がキリスト教の洗礼を受けたのは33歳のときでした。それまでの彼は、すでに16歳で女性と同棲し子どもをもうけるなどの生活を送ります。同じ頃マニ教に入り、息子を心配する母とも仲違いし、カルタゴという大都会で修辞学の教師をしながら暮らします。その後ミラノで修辞学で職を得、マニ教を離れその地の司教アンブロシウスに導かれてキリスト教に入信し洗礼を受けます。きっかけになった出来事は、彼の自叙伝によれば、こうでした。あるとき彼は自らの罪深さに、醜い自分に、絶望して涙にくれ泣いていた。すると、隣の家から、少年か少女かの声で、くり返し歌うような調子で、「取って、読め、取って、読め」という声が聞こえてきたというのです。子どもの遊びの文句にそういうのがあったろうか、思いつかない。急にあふれてくる涙を抑えて、これは、聖書を開いて、最初に目にとまった章を読めという神の命令に違いないと彼は思い、すぐにもどって、聖書をひったくり、「ひったくり、と書いています」、最初に目に止まった章を黙って読み始めたのです。「宴楽と泥酔、好色と淫乱、争いとねたみを捨てよ。主イエス・キリストを着よ。肉欲を満たすことに心を向けるな」。ローマ書13章13、14節です。彼はそれ以上読もうとしませんでした。その必要ありませんでした。この章を読み終わった瞬間、いわば安心の光とでもいったものが、心の中に注ぎ込まれてきて、すべての疑いの闇は消え失せてしまった、と書いています。この聖書との、御言葉との出会いがアウグスティヌスを新しい人生へ導いたのです。387年、彼はアンブロシウスから、16歳のときもうけた子どもと一緒に洗礼を受けています。その数年後その子アデオダトウスは亡くなっています。

もう一人は宗教改革者マルティン・ルターです。彼は29歳の頃、大学をやめて修道院に入ってしまう。祈祷、断食、徹夜、耐寒といった修道僧の拷問のような厳しい生活を送り、3年後に新しくできたヴィッテンベルク大学で教えはじめます。しか

し心は安定しませんでした。神は聖なる方であり完全に正義である、神は人間にも完全な正義を要求する、その要求を満たすことができなければ神はこれを罰し、これをさばく、そういう神である、そうした神への恐れから逃れるために修道に励み完全になろうとしているのではないか、罰を逃れようとしてそうしているのではないか、心は少しも安心しなかったのです。彼は苦悩しつづけます。しかし彼に変化が訪れます。聖書を講じ聖書を学ぶ中から、人は正しく生きることを一生のあいだつねに求め続けるのであって神はこれを許し恵みを与えその恵みによって正義についても人間を完全なものとしてくださる、この恵みにまずもって信頼することではなければならない、神は恐ろしい神ではない、恵みの神なのだ、問題は信仰をもってこれを受け入れることだ、大事なものは「信仰のみ」、こういう新しい立場に辿り着いたのも、ですから聖書によってであつたのです。

何もアウグスティヌスとかルターとか偉人を引っ張り出さなくても、私どもはそれぞれに聖書との出会いをもっているはずで、それをぜひお聞かせいただきたいと思えます。いずれにしても、教会の力は聖書の力です。聖書の力がまた私どもの力であればなりません。聖書によって教えられ、聖書によって支えられ、聖書によって導かれて私どもはみなキリストに従う道を歩んでいくのです。

2 聖書とともに

さて今日の聖書箇所によれば、使徒パウロも、彼の最愛の弟子テモテの行く末を聖書に託しています。テモテが聖書によって教えられ、守られ、導かれて、キリストに従いキリストに奉仕する道を歩んでいくことができるように、彼を聖書に預けたと言つてもよいと思います。

テモテという人は使徒パウロの忠実な伝道の協力者であり、パウロに対して子が父に対するように一緒に福音に仕えた（フィリピ^ン章^三節）人です。パウロがもつとも信頼していた若い伝道者でした。パウロはそのテモテにここで最後の勧めを語ろうとしています。「最後の」というのは、手紙の最後にといい意味ではありません。パウロは、この箇所の続きに、「世を去る時が近づいてきました」（^四章^一節）と書いています。彼は自分に定められていた宣教の戦いを戦い抜いて、今や「正しい審判者である主」によって「義の栄冠を受けるばかりだ」と書いています。もはやテモテとも一緒にいることができない。むしろテモテに後を託そうとしています。しかし時代は「悪くなっていく」ことが予想されます。教会では「悪人や詐欺師」とでも呼ばざるをえない者たちの活動が活発になっていきます。いま激しいばかりでない、これからもっと悪くなるであろう、そうした中で、テモテに、自分を模範とせよとはもはや言うことができない。テモテを、パウロは、誰に、あるいは何に託するのでしょうか。人ではなく聖書に、パウロはテモテを託そうとしているのです（ベンゲル）。これが今

日の聖書箇所の前後関係です。

あなたは・・・自分が幼い日から聖書に親しんできたことを知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。・・・こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです(15,17節)。

ここに出てくる「聖書」、これは「旧約聖書」のことです。また新約聖書はできていません。しかし旧約聖書も私どもにとって聖書です。「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」と書いてある通りです。むろん「キリスト・イエスへの信仰を通して」、これがなければならぬ。他の手紙でパウロは旧約の故事を引いて、つまりモーセが自分の最後を見られないように顔に覆いを掛けたということを引いて、旧約聖書には覆いがかかっているが、キリストを中心に読めばその覆いは取り去られると言っています(コリント⁹章16節)。聖書の中心はイエス・キリストです。はじめに名前を出した宗教改革者ルターは、聖書について、それは、イエスが生まれたときくるんだむつきであり、イエスを寝かせた飼い葉桶だと言っています。このむつきは質素で取るに足りない、この飼い葉桶はよごれている、しかしそこにイエス・キリストがおられるかぎり、輝くのです。そのように言っています。

この聖書に、自分ではなくてこの聖書に、パウロはテモテを託したのです。パウロはテモテに、聖書が彼にとってどのようなものであったかを振り返ってみるよう語っています(15節)。またパウロは、テモテに、聖書を、これからの自分の課題を果たしていくための力強い助けとして見るように勧めています(17節)。それによってテモテは、神に仕える人として、御心になうことを為す者として十分整えられるからです。聖書が、いまやパウロに代わって教え導きます。私どもも聖書へとあずけられたと言っているのかも知れません。聖書に委ねられた者たちです。また私どもキリスト者は聖書という学校の生徒でもあります。つねに聖書を学び聖書ともに歩むということがキリスト者の歩みなのです。

3 神の靈感を受けて

今日の聖書箇所に、私どもが聖書という書物のことを考えるとき、大切な言葉があります。

聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえで有益です(16節)。

この「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」という言葉です。口語訳聖書は「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって」となっています。靈感を受けてということは、むろんいろいろ考えられますし、これまでも多様な解釈がなされてきました。しかしその理解がどのようなものであろうとも、神の霊によって満たされ、支配され、私どもに神の語りかけとして、神の言葉として聞かせ、明らかにし、そして広めるように靈感が働いているということです。聖書の言葉は人間の言葉です。この人間の言葉が聖霊によって神の言葉として私どもに聞かれ、私どもによって認識され公に伝えられるということです。

昔奉仕した教会であるとき保険屋さんが訪ねてきて、教会の宝物に保険をかけられる商品を開発した、ついでには宝物はありますか、保険に入りませんかと勧誘されたことがあります。宝はないので、礼拝堂を見せて、少し金目のものはこの金縁の聖書ぐらいでしょうか言ったら、それ以上は勧誘することをやめて、帰って行ってしまったことがあります。この立派な聖書もどうやら保険をかける対象とは見てもらえなかったようです。

誤解を恐れず言えば本としてのこの聖書がそれ自身として価値あるものと私も思っています。この聖書が尊いのはこの聖書によって神が語ってくださるからです。出エジプトの出来事が教会で証しされ、解放と救済の神がここでも働いてくださり、私どもをあらゆる束縛から解放してくださいさるからです。イエス様の癒やしのが証しされ、あのイエス・キリストがいままたここで働いて、神様の助けが与えられるからです。分厚いけれどもこれは一冊の本にすぎません。しかしこれはイエス・キリストを証している言葉です。イエス・キリストは神の言葉です。このイエス・キリストを証しする聖書も神の言葉です。そして聖書の証しにそって語られる説教も神の言葉です。神の靈感を受けて、とは、神の靈感がここに閉じ込められてしまったことを意味しません。それは神の靈感です。神が自由に働かれます。聖書を通して神が自由にお語りになります。二千年前の言葉が、いまここでの神の言葉となります。聖書は今も新しいのです。神の言葉はいつも出来事として存在します。聖書がここにあるのではなくて聖書が聖書となるのです。神の言葉が、ここで、いま、私において、そして私どもの教会において神の言葉となるのです。

ルターの、聖書はキリストをくるんだむつき、キリストを寝かせた飼葉桶という言葉を紹介しましたが、彼はその言葉の前に、こうも語っています。「君の思いと感情を捨てて、この本を大切にしまえ。この本こそ至高至純の聖所であり、きわめて豊かな鉱脈であって、決してきわめ尽くし、掘り尽くせるものではない。これを大切に、神が聖書の中にも単純率直に置きたもう知恵を発見するように・・・」(卓上語録)。私どもは聖書という学校の生徒です。聖書に親しみ、教えを受け、戒められ、それによって神と教会に仕えることができるよう整えられたいと願います。

(2018年6月3日)